新刊紹介

間寧編『西・中央アジアにおける亀裂構造と政治体制』

間　寧

アジア経済研究所
2006年

これまで開発途上国の政治社会の分析の多くは、民族、宗教、地域などに依拠する社会的差異が潜在的には体制の不安定要因であると議論してきた。しかし、民族、宗教性、地域性などの多様な区分軸が社会に存在しても、民主主義体制または権威主義体制が比較的安定的に維持されてきた国々が、たとえば西・中央アジア地域には存在する。なかでもトルコ、イエメン、シリア、カザフスタンでは過去一〇年間以上、既存の政治体制を揺るがすような紛争や暴動は起きていない。これらの国々において、上述の社会的差異は政治体制をどのように規定し、他方、政治体制はその社会的差異の潜在的な分裂効果をどのように滅殺しようとしているのだろうか。

本書は亀裂（cleavage）という概念を用いて、西・中央アジア諸国、特にトルコ、イエメン、シリア、カザフスタンの社会構造と政治的安定性の関係を考察することを目的としている。亀裂とは、①社会人口的属性と②価値観を共有するとともに、③組織的表現形態を持つ社会集団間に発生する社会的区分軸と定義できる。亀裂という概念の利点は、個々の国について、どの社会的差異が政治的重要性を持つかを相対的に論じられることである。

上記四カ国の代表的な亀裂は、「中心対周辺」亀裂、地域的亀裂、民族的亀裂などである。これらの亀裂は、社会的差異の単なる言い換えではない。それは、これらの亀裂を形成する集団が、①新興政党を結成する、②植民地期に少数派登用・自治権付与などの待遇を受ける、③国家管理の民族団体に加盟するなどにより、（自律的または他律的に）組織的に固定化していることにある。

本書の結論は、政治的安定を維持する上で、亀裂構造（より一般的には社会構造）を政治体制に反映させる方法とさせない方法の二つがあるということである。もちろん、政治体制が民主主義的か否かにより、「反映」を主導する主体は異なるので（前者では政党制、後者では支配体制）、以下では各論を体制別に見ていこう。

民主主義体制では、まずトルコのように、亀裂構造がそのまま政党制に反映されると亀裂集団と政党の間に安定的な関係を築くことができる。第二章（間寧）は、「周辺」の特性を持つ有権者とその支持政党の関係をミクロ、マクロ・データを用いて分析した。そして、これまで一括りに論じられていた「周辺」が、価値観や支持政党の上でもイスラーム宗教性とクルド民族主義に構造分化し、亀裂構造反映がさらに進んでいることを明らかにした。

次に、イエメンのように、特定の亀裂勢力が優勢の場合、他の亀裂勢力をも取り込むような政党制を形成することも可能である。第三章（松本弘）は、イエメン内戦後に政治均衡が北側の圧倒的有利に転じると、与党国民全体会議の影響力が全土に浸透し、内戦前に見られた地方間対抗軸の政党制への反映度合いが低下したことを見いだした。そして、与党が包括政党化する中、「中心対周辺」亀裂が新たな政治軸として台頭する可能性を指摘した。

他方、権威主義体制の場合、一つには、特定の亀裂を軸にして国民を内包または排除するという方法がある。第四章（青山弘之）は、シリアの体制が、アラブ対クルドの民族的亀裂に起因する社会的差別を政治制度上で合法化・正式化することにより、潜在的不安定要因を抑え込んできたことを明らかにした。ただしこの方法が可能だったのは、排除の対象となったクルド民族が全人口の一割弱と比較的少ないことにもよる。

権威主義体制でも民族的亀裂を統合的に内包しているのは、第五章（岡奈津子）に見るカザフスタンである。基幹民族（カザフ人）以外の民族が人口のほぼ半数を占めるこの多民族国家において、体制は民族エリートの統制（抑圧と懐柔）により多民族の「融和」を作り出している。その中心的役割を果たすカザフスタン諸民族会議は、ほぼすべての民族団体を統合した。そして非カザフ民族に対しても役職配分や民族意識配慮などにより体制恭順を促している。

最後に、上記の亀裂の「反映」方法が一般的な政治的安定の処方箋であると主張するつもりはない。むしろ本書の意図は、各国多様な亀裂構造ないし政治体制を前提とした上で、各国の現実的な体制維持・安定方法がどのように規定されているかを示すことにあった。民族や宗教の差異ではなく、差異の組織化あるいは取り込み方が、政治的競争や支配の構図を左右することの実証例を提示できたとすれば幸いである。

（はざま　やすし／アジア経済研究所地域研究センター）